風の末裔シリーズ・5th シーズンの2

～六連星・Ⅱ（むつらほし）～

©西風そら

http://nisikaze.sakura.ne.jp

～市場にて～

賑やかな掛け声の屋台の間を、ヤンは浮き立つ気分で泳ぎ歩いていた。

さっき漢方薬商人に売った大鹿の角が、思いの外の金額になった。これなら若馬一頭買っても、残りで母さんにお土産を買って帰ってあげられる。

甘い物がいいかしら、それとも珍しい果物？　キョロキョロと歩く少年の前に、突然何かが転がって来た。

「痛ぁい!!」

転がったのは細い手足の男の子で、ヤンに蹴飛ばされる形になった。色白で、頭は綿帽子みたいな白い猫っ毛。この辺の部族にはいないタイプだ。これまた薄い色の瞳を真ん丸にして、ヤンの頭を凝視している。

「ごめんごめん、だいじょう…？」

ヤンの言葉が終わる前に、横から野太い腕が伸びて、子供の首根っこを掴まえた。

料理人らしい前掛けの、赤い顔をした大男。

「このガキ、逃げやがって！　そんな事をしたらどうなるか、思い知らせてやる！」

振り上げる拳を、後ろから掴む手があった。

「どんな事してそうなるんですか？」

薄汚れたフードマントの、背の高い男性。しかしフードの下の群青の瞳は、驚くほど深く澄んでいる。

「こんな細っこい子供に手をあげたら、壊れてしまいますよ？」

掴んでいる手が酷い火傷でひきつれているのに、大男はちょっと怯んだが、すぐに強気で言い返した。

「は！　壊れたって構いやしない！　こいつは食い逃げ野郎だ！　真心込めた料理人の敵だ！」

「…壊れるのは貴方ですよ」

「な、何ぃ?!　ひぇっ!!」

群青の男性は大して力を入れている風でもないのに、大男は腕を捻ってそっくり返った。

「まぁまぁ」

もう一人フードマントの男性が現れて、両者の腕を取って離した。こちらのヒトは小柄で肩幅も小さく、フードがブカブカで顔が見えない。

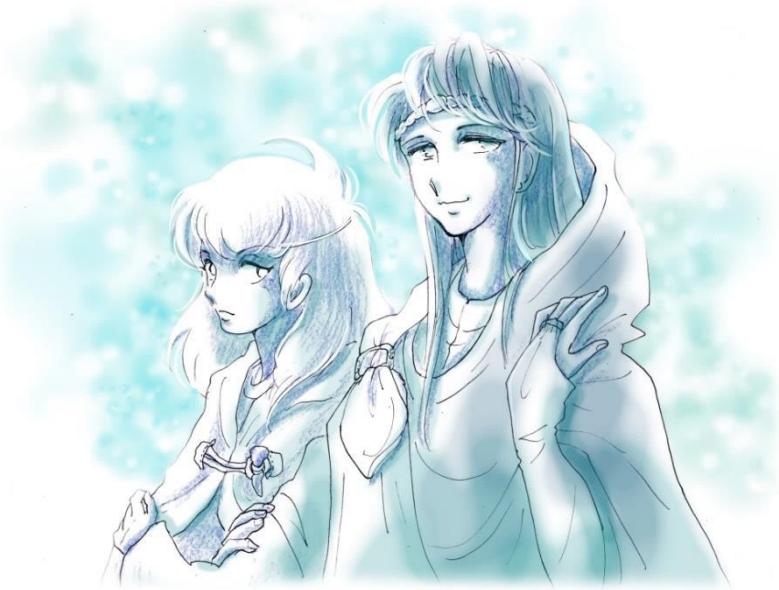
「食い逃げしたのはこの子供だし、仕方がないんじゃないの？」

「そ、その通りだ！　俺は被害者だ！」

大男は肘をさすって、子供の首根っこをもう一度捕まえ直し

た。
「何だったら、旦那達が払ってくれるか？　こいつの食った分！」
よく出来た話なら、ここで男性二人が上等の金貨をピンと弾いて、釣りは要らないぜ、とか言ってスマートに去るんだろう。
しかし、フードの二人は顔を見合わせた。
「貴方、お金、持っていますか？」
「いいえ…」
二人、首をすくめた。
「こういう時って、どうすればいいんでしょうかね」
群青のヒトは、屈んで子供を覗き込んだ。
「まずは謝りなさい。料理人の真心を踏みにじったんですから」
「…ご、ごめんなさい…」
子供は捕まれたまま大男を見上げた。
「ぼ、僕、食べ物にお金が要るって知らなかったんだ。『モノ』はお金でやり取りされるって知っていたけれど、天の恵みの命の糧にもお金が要るなんて思わなかったの」
大男は気勢を削がれて、小さい目をパチパチした。
群青の男性が、ポンと手を叩いた。
「成る程、…真理だ」
小柄な男性も顎に手をやった。
「興味深い屁理屈だな…」
「真理も理屈もあるか!!」
大男は頭をブンブン振った。
「あんたらと関わってると、こっちまでおかしくなる！　金持ってないんなら、口出しすんじゃねぇ！」
ぷくく……
吹き出す声がした。大男がギッとそちらを睨む。
「あっ、ごめんなさい」
ヤンは慌てて謝った。活気よく金品飛び交う市の真っ只中で、お金に縁のなさそうな調子っ外れが寄り集まって、そんな中で正論を言っているこの大男が何だか滑稽に見えて、思わず吹き出しちゃったのだ。
「あの…僕、ちょっとなら払えます。その子、幾ら分食べたんですか？」
払いは、お土産に考えていた金額で足りた。母さんには、今の面白かった話で勘弁して貰おう。
ちょっと出来ていた野次馬も散った。
「えと…」
子供はヤンに頭を下げた。
「ありがとうございました」

「うん」
ヤンは屈んで、子供の両肩に手を置いた。
「僕は狩猟の民だ。皆で力を合わせて、大変な苦労をして獲物を捕る。ね、あそこで鹿の干し肉も売っているだろう？。食べ物は天からの頂き物だけれど、それを得る苦労は対価を得てもいいんだよ。あのおじさんだって、材料を調達して、美味しく料理する労力は、対価を得るべきお仕事なの」
「はい」
子供は素直に頷いた。
「あの…僕、お金ないけど、これ…」
腰ベルトの物入れから、猫の形の可愛い木彫りが出て来た。
「いいのかい？」
「僕が作ったの、また作れるから」
「そう、有り難く貰うね。お土産に丁度いい。僕の母さん、猫好きなんだ」
二人の少年は、小さく笑い合った。
「いやいや、よかった」
「ではでは」
さっきのフードの男性二人が、両方からヤンの肩を掴んだ。
「行きましょうかね」
「？？　どっ、どこへ？」
「食べ物屋さんですよ」
「ボクもお腹ペコペコ」
「あ、貴方がた、お金持ってないんでしょう？」
「持っているでしょう、貴方が」
今度はヤンの頭が混乱した。
「駄目ですよ！　残りのお金は、僕に必要なんです！」
「何故…？」
「馬が欲しいんです！　空を飛ぶ為の馬が…!!」
思わず口走って、ヤンは口に手を当てた。おかしな事を言う子供だって、苦笑されちまう。
しかし群青のヒトは笑いも驚きもせず、大真面目な顔でヤンを覗き込んだ。近くで見ると吸い込まれそうな、湖みたいな青。
「…ふうん…」
小柄なヒトが、フードを下ろしてヤンを見た。薄い水色の髪と瞳の、蒼の妖精。
「ルウに言われた事、無くさないで持ち続けているのか」
三度目の邂逅(かいこう)に、ヤンは息を呑んだ。
「あっ！」
男性二人は同時に何かを見つけて、フードを被り直した。



「行くぞ！」
驚くヤンを引っ張って、白い猫毛の子供に声を掛ける。
「キミの連れが来たようだ。じゃあ、またどこかで。あと、食い逃げは堂々と逃げるのがコツだ」
二人の大人は両方からヤンの脇を抱えて、風のように人混みに消えた。
＊＊＊
「ここにいたんだ、どうしたの？　フウヤ」
呆然と突っ立っている白い猫毛の子供に、人混みを掻き分けて長い髪の妖精が近付いた。
「着る物とか、だいたい揃ったよ。他に欲しい物ない？」
「…本当に、いいです、義兄様。そんなにしてくれなくても」
「ちょっと位、義弟(おとうと)に何かさせてよ。僕、妹しかいなかったからさ」
「……」
フウヤは、さっきから気に掛かっていた変な既視感の謎が解けた。あの群青色のヒト、ナーガ義兄様にどことなく似ているんだ。
「そうそう、フウヤに合いそうな馬がいたんだ。見に行くかい？」
「あ、ありがとう。でも、いい…」
「遠慮しなくていいよ、行こう」

「あの…、義兄様」
「ん？」
「僕、やっぱり蒼の里に行かなきゃダメ？」
「まだそんな事言ってんの？　フウリに責任持って預かるって約束したんだから」
「うん…、だけれどそれじゃ、風露を出ても、僕、全然一人立ちした事になっていない」
「まだ十二歳なんだから、そんなに急がなくてもいいよ」
「でも、世間知らずで…さっきだって…」
「ん？」
「あ…ううん…」
「とにかく、馬を見に行こうよ。会ったら欲しくなるかもしれないよ」
　気乗りのしない男の子を促して、長い髪の妖精は、家畜市場に向いて歩き出した。

「ふぃ～～、お腹一杯」
「いいんですか、カワセミ。そんなに食べたら術が逃げるんじゃないんですか？」
「大丈夫、ヒトの奢りだから」
「…都合のいいお腹ですね」

「あの～…」
　積み上げられた皿の間から、ヤンの心配顔が覗いた。
「本当に、馬をくれるんでしょうね。乗馬用の若駒を」
「あ、ああ……」
　二人の蒼の妖精は顔を見合わせた。
「言いましたっけ、そんな事」
「言いましたよ!!」
　ヤンはテーブルを叩いて立ち上がった。
「やっぱり騙すつもりだったんですか?!」
「騙す…？」
　水色の妖精が、骨をくわえたまま立ち上がった。
「ボクがキミを騙す？　へぇ～、騙すってぇ？」
　骨を上下に動かしながら、テーブルに肘を付いて、ヤンに顔を近付ける。
「カワセミ、お行儀が悪いですよ」
　群青のヒトがナフキンで口元を拭きながら澄まして言った。
「騙すつもりはありませんよ。大丈夫ですよ。ええ、ええ…」
「……」
　ヤンは立ち上がったまま限りなく不安になった。
　この二人と意思を通じさせる自信がない。やっぱり誘いに乗らずに馬市に直行した方がよかったか？　でも、この水色のヒ

トは、部落の恩人だ。

「あっ！」

二人の男性はさっきと同じ感じで、雑踏の一点を見た。ヤンもつられてそちらを見る。

先程の白い猫毛の男の子が歩いて来る。目を戻すと……。

「あああああ!!」

サラダボウルに骨がカランと回り、二脚の椅子は無人だった。

「やられたあああああ!!」

慌てて辺りを見回す。いない…、いない…、いた!!

人混みに駆け入ろうとするヤンの前に、前掛けの店主が立ち塞がった。マークしていたんだろう。

「このガキ!!　よくもヌケヌケと!!」

「待って待って!!　あのヒト…!!」

ヤンは店主をすり抜けて、騒ぎに驚いてこちらを向いている長い髪の男性に詰め寄った。

「何だって逃げるんです！　約束が……」

ここまで言って、人違いに気付いた。凄く似ているけれど……別人だ…。

ヤンはガックリ肩を落とした。

「どうしたの？　君？」

「このヒト、さっき僕を助けてくれたの。ねぇ、お兄さん、あの二人組に『クイニゲ』されたの？」

ヤンは肩を落として頷(うなず)いた。

「貴方によく似たヒトだったので……すみません…」

「…食い逃げ……僕に、似た……」

不意に、白い髪の子供が、ヤンの腕に自分の腕を絡めて、人混みに駆け入った。

「あっ!!」

呆気に取られるナーガの肩を、太い腕が押さえた。

「お兄さん、知り合いなら、お勘定！」

家畜市場の大きな牛達の間に、白い髪の子供とヤンが、隠れるように座り込んでいる。

「何だってんだ？　一体…」

「ね、お兄さん」

「ヤンだよ」

「そう、ヤン、…僕、フウヤ」

「うん、フウヤ、何か用か？」

「ヤンの頭の、…えと、そう、その羽根飾り。それが、ちょっと、気になったの」

「ん？　これは、お守り」

「そう…」
「それだけ？」
「ん…」
「？？」
フウヤは決心したように顔を上げた。
「ヤン、狩猟の民だって言ったよね」
「ああ」
「僕を連れてってくれない？　ヤンの召使いにして。僕、狩猟の民になりたい。対価を得るべき仕事を出来る者になりたいんだ」
「は？　いきなり？　無理だよ」
「お願い」
「何で？」
「緋色の羽根は、僕の道標なんだ」
「そんな無茶な」
「僕、昨日、生まれた村を出たの。でも、あのヒトとは行きたくないの」
「…!!　ヒト買い、か？」
ヤンの表情が曇った。
「ヒトカイ…？　えっと…うん、そうそう」
「……」
「ここにいた！」
牛の頭越しに、さっきのフウヤの連れの男性が覗いた。
「まったく、いきなり、どうしたの？」
「……」
一見優しそうだけれど、この虫も殺さなそうな顔で、子供を家畜みたいに集めて、怖い所に売り飛ばすんだろうか？
ヤンはすっくと立ち上がって、懐から巾着袋を出した。
「足りないかも…。だけど、これでこの子を自由にして!!」
押し付けられた財布に目を白黒させる男性を尻目に、ヤンはフウヤの手を握って駆け出した。
＊＊＊
市を抜け、街を抜け、少年二人は手を繋いでひたすら駆けた。
「追って来る感じじゃないよ」
フウヤが振り向いて言った。それでも用心して岩影に隠れて息を付いた。
「あれで足りたのか？　お前、安かったんだな。まあ、細っこいもんな」
「でも、丈夫だよ。ヤンの役に立つよ」
「駄目だよ。フウヤ、もう自由なんだから、好きな所へ行けよ」
「…ヤン…」

「僕は、ヒト買いじゃないし」
「…馬を買う為のお金だったんでしょう？」
「また稼ぐさ…」
「……」

微かに草を踏む音がした。
フウヤが岩影からそっと覗いて、声を上げた。
「ヤン!!」
「追って来たのか？」
「違う、ヤン、あれ…!!」
ヤンもそちらを見て、息を呑んだ。
夕陽のオレンジの草原を、肩を並べて二頭の馬が歩いて来る。ヒトの姿はない。二頭とも骨格の綺麗な立派な若駒で、新品の馬具を付けていた。
片方は四白流星の栗毛に黒い鞍。
片方は一点の白もない黒砂糖みたいな栃栗毛に白い鞍。
「……」
「誰かの馬かな？」
「いや……」
ヤンは栗毛の頭絡に結ばれた細紙をほどいた。
《――ごちそうさまでした――》

「……」
「ヤン？」
「騙されたんじゃなかった…」
「ヤン…」
「よかった…」
「うん、そうだね、よかったね、ヤン」
「フウヤ…」

黒砂糖はフウヤの分の馬なんだろう。
あのヒト達は二人が一緒になるのが分かっていたのだろうか？　それを考えると、ヤンはフウヤを突き放す気になれず、結局一緒に三峰の部落へ帰った。
族長の所へ行き、街であった経緯を話した。
ヤンが馬のオマケに子供を連れ帰ったと聞いて、村人が集まって来た。昔の黒死病で、部落に子供は極端に少ない。
鷲羽のイフルートが総括した。
「いいんじゃないか？　若い者は宝だ。お前、この部落の子供になるか？　この部落で大人になって所帯を持ち、部落の一員として骨を埋めるか？」
「分かんない、僕、来た所だもん」
白い子供はキョンと答えた。

「……」
「でも、ヤンは好きだし、狩猟の民ってカッコイイと思ったの。大人になって死ぬ時の事、今、決めなきゃ駄目？」
「正直者だ」
イフルートは白い歯を見せて苦笑した。
「その場限りの迎合を言うお調子者なら要らない。部落の一員になるかは、暫く居てから決めるがよい」

皆の信頼厚いイフルートが認めてくれたんなら安泰だ。ヤンもフウヤに微笑みかけた。
「でも、ヒト買いから逃げたのなら、故郷へ帰りたくないの？お母さんは？」
一人のオカミさんが女性らしい心配をした。フウヤは黙った。
「馬鹿ね、子供をヒト買いに渡すなんて、よくよくの事情があったのよ」
助け船を出したのはヤンの母親だ。
「うちへおいで。フワフワ猫毛が可愛い事」
「猫じゃないんだ。ヒトの子だぞ」
彼女の猫好きを知っている村人達は笑った。
「だって、ヤンにだって兄弟が欲しいわ。ティコだって、ビィだって、生きていればこれ位…」

そこまで言って、母親は慌てて口をつぐんだ。
それは言わないお約束なのだ。黒死病で幼子を亡くしたのは、彼女だけではない。
何にしても、仲のいいヤンの家庭に引き取られるのが自然だろう。その日はお開きになり、皆帰宅した。
家の物入れの奥に仕舞った子供用の衣服、あの子に合うかしら？　明日持って行ってあげよう…と考えている者が複数いた。子供の数より、仕舞われた小さな衣服の数が多い部落だった…。

部落の真上の夜空。
星を背景に、一頭の騎馬が浮かぶ。
「まったく、誰が、ヒト買いだ！」
ナーガは苦笑いして馬を上昇させた。
「結局、自分で道を切り開いてしまった。フウリ、君に似て、君の弟も本当に頑固者で…、大したモンだよ」

蒼い月の草原。
二頭の草の馬の上の、二人のフードマントの人影。
群青の髪のヒトが、耳に手をやる。
「ピアスがないと、すぐ耳の穴が塞がっちゃうんですよね…」
「でも、大したモンだね。馬二頭に馬具まで付けて、お釣りが

来た。お腹も膨れないのにね、あんな石」
「あれ？　石フェチの貴方とは思えない台詞(セリフ)ですね」
「どんな石でもいいって訳じゃないよ。あのピアスはキラキラ綺麗なだけで、何の力も感じられなかったもの」
「…ふうん…。まあ、欲しいヒトがいるから、値段も付くんです。感謝、感謝、ですよ」

～薄暮の唄～

息の出来ないノスリが、長椅子に転がっている。
大机でもホルズがうつ伏せて、呼吸困難になってる。
入り口に突っ立っている、不機嫌なナーガ。
「そんなに笑わなくったっていいじゃないですか」
「だ、だって…、他人の食い逃げの代金払わされて、ヒト買い呼ばわりされた挙句、義弟に逃げられたって？」
「全く…、歴代長の中で、多分一番愉快な長様だぞ！　お前さんは！」
「はいはい…、全然威厳のない長だって言いたいんでしょ？。僕は僕なんだから、長になったからって急には変わりませんよ」
「まあ、そうだ。だが、その『僕』ってのもやめて、我とか我輩とか儂(わし)とか、権力者らしくしたらどうだ？」
「嫌ですよ。さすがに白髪のお爺さんになったら考えるでしょうけれど」

「ただいまあ！　あっ、ナーガ様、おかえりなさい。フウヤって子は？　俺、案内しますよ」
元気よく入って来て一気に喋ったのは、よく日焼けしたユゥジーンだ。最近ノスリのやっていた腕力仕事を引き継いで、また腕が一回り太くなった。
「フウヤは来ない事になったんだ。まあ色々あって…」
ホルズが適当に濁した。
「えっ、そうなんですか?!　残念です。今朝、鷹の手紙を見せて貰って、凄く楽しみにしていたのに」
ユゥジーンは心底がっかりした様子だった。
「会いたかった？」
「俺だけじゃなく、皆、興味津々で待っていたんですよ」
「そうなの？」
「ええ、あの女嫌いのナーガ様を射止めた絶世の美女の弟なんだから、さぞかし美少年だろうって、洗濯場の女の子達がめちゃめちゃ盛り上ってましたよ」
「……」
「どっち方向に盛り上がってんだ？　こりゃ、来なくてよかっ

たのかもしれんな」
　ノスリとホルズは風露の部落に何度か足を運んで、フウヤとも顔見知りだ。
「フウリは確かに唐変木がノックアウトされただけあって、すこぶる妖艶な美女だ。しかし、フウヤは女の子のオモチャになるようなタイプじゃないぞ」
「そうですよ」
　ナーガが珍しく執務室コンビに同調した。
　確かに蒼の里がこんな感じじゃ、硬派に一人立ちしたがっていたフウヤには、三峰の方が向いていたんだろう。
　物事って成るように転がるモンだ。長であろうと神であろうと、子供の直感力には敵わない。

　洗濯場の女の子達じゃないけれど、ユゥジーンは結構フウヤに会えるのを楽しみにしていた。
　自分の幼年期は災厄の時代の真っ只中で、同年代の子供が少ない。ずっと同じ顔ぶれで勉強したり遊んだりして来た。だから、外から来たルウシェルが凄く新鮮だった。そういうのもあって、新しい顔に会えるのに期待していたんだけれど…。
　後、ナーガ様の奥方のいる風露の部落に興味深々で、話も聞きたかったのだ。

「谷にそそり立つ塔の、楽器造りの、風露の部落か…」
　きっと、すこぶるストイックで、神秘的なヒト達に違いない。

　ユゥジーンのそちらの方の憧れは、以外と早くに叶えられた。
　その日から数日後……
「おお、ユゥジーン、丁度よかった。風露の部落までひとっ飛びしてくれ」
　仕事が終わって執務室に戻ると、慌てた感じのホルズに言われた。
「急用だ。いつもはあそこの用事はナーガが行くんだが、今日は遠方の仕事に出ている」
「は、はい！」
「場所は分かるな。これが書状。きちんと関で手続きして、ラゥ老師に繋いで貰うんだぞ。えっと…それから、何だっけ…」
「直接塔に降りちゃ駄目、音合わせの邪魔をしちゃ駄目、風露の事はナーガ様に何回も教えて貰っています」
　ユゥジーンは、はやる気持ちで執務室を飛び出した。出来れば明るい内に部落の全景を見たいと思ったのだ。

　…という訳で、夕映えの空を風露の谷に向けて飛ぶ、ワクワクドキドキのユゥジーンがいた。

山間に、夕陽のオレンジに染まる霧の谷が見えた。
「あすこだ」
馬を下降させる。オレンジの中に群塔の影が現れる。
「綺麗だなあ…」
理想を裏切らない幻想的な風景。
しかも運よく音合わせの時間だった。それぞれの尖塔から、様々な楽器の単音が流れて来た。谷に響く不思議なコダマ。
しばし魅入られたユゥジーンは、目の前の空間の異常に気付くのが遅れた。
「う…あっ?!」
空が川面みたいに歪んで、半透明の灰色に波打っている。
「何？　何なんだ!!」
その波に突っ込みそうになった。
「止まれ――――!!」
ユゥジーンの馬は大した能力もなく平凡な馬だが、主人への忠実はピカイチだ。止まれと言われて、頑張って急停止したもんで、鞍上が前のめりになった。
「うわっ！」
馬の首にぶら下がって耐えたが、首に掛けていた巾着がすっぽ抜けてしまった。
「あっ…あっ…!!」
掴もうとした指を弾いて、それは谷へ落ちて行った。中身は大切な『トモダチの祝福』の標(しるし)だ。
「どうしよう…」
すぐに探せば見付けられるかもしれない。でも、ユゥジーンはその場所をしっかり記憶して、後で来る事にした。ホルズ様は急用と言っていたし、先に風露の任務を済ませなきゃ。
目を上げると、さっきの灰色は消えていた。
何だったんだろう…？

＊＊＊

「蒼の里から急ぎの連絡です」
関の番人に書状を渡し、名簿に名前を書きながら聞いてみた。
「さっき、音が鳴っている時、空が川面みたいに歪んでいたんです。よくある事なんですか？」
「…空が？」
番人の若者は呑気な感じで窓から首を伸ばして空を見上げた。
「さあ、そういう話は聞いた事がありません。私どもは、空を飛べませんし」
「そうですか…」
どうも、自分達の部落の外の事には興味が薄い感じだ。
書状を持ってツタを滑って行った子供が戻って来た。
「ラゥ老師からお返事の手紙です」

子供は肩から掛けた鞄から手紙を出してユゥジーンに渡し、その他に石板を番人に差し出した。
「こっちは回覧板です」
「んん?」
番人は蝋石で書かれた文字を読んで、ユゥジーンに向いた。
「さっきの、『空間の歪み』の事、ここに書かれています。蒼の里からの知らせは、その事だったみたいですね」
「…?」
「この辺りに性質(たち)のよくない空間の歪みが現れる恐れがある、見付けたら頭を無にして、速やかにその場を離れる事、けして興味を持ってはならないって、書かれています」
「……」
ひどいな、ホルズ様、教えてくれててもいいのに…、危うく飛び込む所だったじゃないか。
子供は石板を持って次の回覧場所にツタを滑って行った。
「どうも、ご苦労様でした」
番人に言われ、ユゥジーンは躊躇した。
もう帰ってもいいって事なんだろうけれど…。
「あの…」
「はい?」
「風露の部落にはナーガ様の奥方様がいらっしゃるんですよね」
「ああ、二胡造りのフウリですね」
「ちょっとご挨拶したいと思うんですが…」
「それはいけません」
「えっ?」
「フウリは風露の大切な職人です。風露の財なんです。老師様と我々の信頼を得て夫婦(めおと)となったナーガ様は、特別中の特別なんです」
「…そうですか…」
想像以上に閉ざされた部落なんだ。素直に従っておくべきだろう。それに、さっき落とした御守り袋を捜さなくっちゃ。
「では、失礼します」
「すみませんね…。あ、楽器を入り用な際は宜しく」
「あ、はい…」
とにかく、価値観の特化した部落なんだな。憧れていたわりにはアッケなかった。まあ、そんなモノなんだろう…。
注意してゆっくり飛んだが、もう空間の歪みには遭遇しなかった。そもそも何なんだろ、あれ?。帰ったらノスリ様に聞いてみよう。
さっき袋を落とした付近に降りてみた。

「見付かるかなあ？」
木の枝の一本一本に目を凝らしながら地面を目指す。
あの羽根は自分にとって特別なモノだ。自分の生き方その物を変えてくれた……。

蒼の里にルウがいたのは、あの夏から秋の、たった三ヶ月。なのにオレンジの瞳の鮮やかさと共に、自分の人生をくっきり彩っている。
最初は偉そうなオンナだと思った。でも、それは、ルウが包み込む大きさを持っていたからだ。
他人を守る事、分け与える事、見返りを求めない事…。今、ユゥジーンが七転八倒しながら目指している事を、当時同い年だったルウは、呼吸をするように体現していた。
シンリィには、大した思い出もない。
羽根の子供が里へ来た時、自分を含めて皆、遠巻きに避けていた。喋らないのは、悪魔に心を持って行かれて周りに無関心だからだと、噂を丸呑みにしていた。
別れる前の日、初めて、唯一、手渡された一枚の羽毛。それが、後になればなるほどユゥジーンの心に深く浸透して行った。
もしかして、あの羽根の子供は、いつだって手を差し出していたんじゃないか？　こちらが受け取る手を出さなかっただけで……。
「そういえばエノシラ母さんが言ってた…」
その時は分からなくても、時間が経って、ずっと後に分かる事がある…って。
人生で、ずっと近くに居るのに、心に残らないヒトもいる。逆に、ちょっとしか一緒に居なかったのに、大きく心を占めるヒトがいる。ユゥジーンにとって、ルウとシンリィはそんな存在だった。
だから、ノスリ長に正式に執務室の一員になるか？　って聞かれた時、決心した。頑張って実力を付けて、西風の里に行ける身になろうと。
行方知れずのシンリィを探しに行ける力を付けようと。
今度はこちらから手を差し出そうと。

ウロウロ飛び回ったけれど、お守り袋は見付からなかった。辺りは薄暗い。例え今日見付からなくても、時間が出来る度に探しに来よう。そう決心した時、幽(かす)かな声を聞いた。

＊＊＊

地上に降りて下馬し、声のする方に分け入ると、小さな広場に出た。薄暮(はくぼ)の淡いオレンジの中、倒木の枝の高い所に一人の女の子が腰掛けていた。

声は唄だった。細い声の、のったりした唄。
女の子の首にエノシラの作ってくれたお守り袋が掛かり、中身の緋(あか)い羽根がお手玉みたいに弄(もてあそ)ばれていた。
「あっ、俺の…!!」
思わず叫んで進み出るユゥジーンに、女の子はキッと振り向いた。七つ位の、ビー玉みたいな瞳の子。紫のたっぷりした前髪から、風露の子供だと思われる。
「あの、それ、俺の落とし物なんだ。その羽根、なくさないで!」
ユゥジーンはそわそわと駆け寄った。
女の子は羽根を袋にしまって封を閉じ、黙って枝から飛び降りた。
「えと、拾ってくれて、有難う…」
ユゥジーンは手を出したが、女の子はお守りを首に掛けたまま、ツイと後ろを向いた。
「これ、欲しい。ちょうだい」
「えっ?! 駄目だよ!」
「どおして?」
「大切な物なんだ。ねえ、返しておくれ」
「ふうん…」
女の子は大きな瞳で、じぃっとユゥジーンをねめつけた。
「オネガイ、きいてくれたら、返してアゲル」
「お願い? ああ、いいよ。俺に出来る事かな?」
ユゥジーンは素直に頷いた。年端も行かない子供の願い事だ。せいぜい草の馬に乗っけてくれとかだろう。
「うん…」
女の子は勿体ぶって、袋をいじりながら倒木の低い所に腰掛けた。ユゥジーンも並んで座った。取り敢えずこの子供のペースに合わせよう。
「あたし、リリ」
「ああ、俺はユゥジーン」
「ゆっじん、草のウマで飛んでた。蒼のよーせいさんでしょ?」
「ああ」
「あたしのとおさまも蒼のよーせいなの。なーが・らくしゃっていう名前……知ってる?」
ユゥジーンはしゃっくりしたみたいに息を呑み込んだ。知ってるも何も…。じゃあこの子が、ナーガ様の大切な後継者?
リリは真剣な表情で、絶句しているユゥジーンを覗き込んだ。
「チエを貸して欲しいの」
「知恵?」
「ん、あたし、風露の事しか知らないから。蒼のよーせいさんならよいチエがあると思って」
「ああ、そうか…、うん、いいよ。考えてあげる。どんな事?」

「うん…」
リリはちょっと躊躇してから、思い切ったように喋った。
「あたしが、蒼の里へ行かなくてもいい方法を考えて欲しいの」
「ええっ?」
びっくりしてマジマジ見る少年に、リリは言葉を続けた。
「あたし、このまま風露に残って、楽器造りのショクニンになるの」
「えええ――っ?!」
ユゥジーンはつい大きい声を出してしまった。
「そんなにオドロク?」
「だだ、だって…」
「あんたがそんなにオドロクんじゃ、とおさまには、とても言えないね…」
「……」
解らない…。蒼の妖精として大空を自由に飛び回れる身の上なのに…、外の者と話す事もままならず、一生霧の塔で暮らす職人の道を選ぶっていうのか?
「えと、リリ、えーと……。君、蒼の里へ来た事ないじゃない。もっと、その、いろいろ体験してから将来を決めても、遅くないんじゃないの?」
「……」
「だって、里では皆、君の事を待っているんだよ。大歓迎なんだよ」
「……あたしを知ろうともしないヒトに歓迎されても、嬉しくない…」
「あ…」
「もういい!!」
リリはイライラした様子で立ち上がった
「あんたも頭から、あたしが蒼の里へ行くべきだって思ってるんだ!! あたしのコト、カケラも知らない癖に!!」
癇癪の手が、小さいお守り袋を斜面の繁みに投げ付けた。
「あっ! 何するんだ!」
「ゆぅじん、きらい! とっとと帰っちゃえ!」
「リリ!!」
ユゥジーンはお守り袋を拾いに行くより、リリの方に向いて肩を掴まえた。
「あたし帰る! 離して離して!!」
「リリってば!!」
「きゃあああ!! 誰かあ!!」
ガサガサと繁みが揺れて、紫の頭が五つ六つ現れた。リリよ

り幾分年上の、風露の子供達だ。
ユゥジーンは慌てた。まるで山の中で女の子に悪さしていたみたいじゃないか。
でも、子供達が不審そうに睨んだのは、リリの方だった。
「なぁんだ、リリか」
「誰、そのヒト？」
「蒼の里のヒトだよ」
さっき関で会った伝令の子供が混ざっている。山で山菜を取る仲間に、回覧板を回しに来たんだろう。
「ふうん、リリを連れに来たの？」
「いや、別に……」
ユゥジーンが言う前に、リリが叫んだ。
「あたし、蒼の里なんか行かないモン！　風露で楽器造りのショクニンになるんだモン!!」
「嘘つき！」
「またリリが嘘ついた！」
「嘘つきリリ!!」
「大きくなったら行っちゃう癖に！」
「行かないモン!!」
「行くよね、ねえ、リリは蒼の里の偉いヒトの子供なんでしょ？」
子供達はユゥジーンの方を見た。
「風露の子じゃないもの。行っちゃう子なんでしょ？」
「…いや、リリは……」
ユゥジーンは絶句した。いずれ出て行く特別な子として、運命共同体の風露で育つのがどういう事か…、確かに自分は、カケラも知っていなかった。
「おい、皆、暗くなる前に帰ろう」
「うん、かーえろ、老師様に叱られる」
「特別扱いのリリは叱られなーい！」
子供達はバラバラと山中に去った。

後に、俯(うつむ)いたリリとユゥジーンが残る。
「…リリ……」
「…特別扱いじゃないモン…。ちゃんと叱られるモン…」
「リリ…ごめんな…」
「何を謝るの?!」
リリは顔を上げてユゥジーンを睨んだ。目の下が膨らんで、懸命に涙を堪えている。
「あたしの事なんか何も分かっていない癖に！」
「リリ!!」
ユゥジーンは両手をリリの肩に置いた。
「じゃあ、教えてよ」

「……」
「リリの事、教えて。俺、ちゃんと聞くから」
「…ゆぅじん…」
＊＊＊
ユゥジーンは、自分の何気ない言葉が、この子をとても傷付けていた事を知った。まったく、シンリィの事を頭から決め付けていた自分から、成長していないじゃないか。
「ね、リリ…。いつでもまた会えるからって、後回しにしていたヒトに、結局永遠に会えなくなっちゃった事ってない？」
唐突な質問に、リリは目をパチパチした。
「えっと……分かんナイ。ないと、思う……」
「俺は、ある。あのお守り袋の中の羽根をくれた奴」
「……」
「とっても後悔してる。もっといろいろ、分かり合いたかった」
「…そうなの…」
「だから、俺、どんなヒトに会っても、『その時』を大切にしようって思っている。リリとも『今』を大切にしたい。話してくれない？　リリが何で蒼の里へ来たくないのか」
「……」
リリは、さっきお守り袋を投げた繋みに分け入った。
「ごめんね…、大切なモノ、投げちゃって…」
「ああ…」
ユゥジーンも後に続く。
もういい加減、薄暗い。今日は見付けられないかもしれない。
「あのね、あんな子達ばっかりじゃナイのよ。優しいお友達もいるわ」
リリは繋みをかき分けながら話し出した。最初の方のこまっしゃくれた変なイントネーションは、もうない。
「だから、さっきの事とか、とおさまに言わないでね」
「ああ、分かった、約束するよ」
「あのね、あたし……とおさまや、蒼の里の人達が期待してるような子じゃないと思うの」
「…リリ…」
「きっとガッカリされる。自分で分かるモン」
リリは繋みの中で立ち止まって空中を見つめた。また目の下が膨らんで来ている。
「こわい…。風露で要らない子で、蒼の里でも要らない子になっちゃったら……」
「リリ……」
「誰もあたしを分かろうとしないんなら、あたしが自分であたしの事、ちゃんと分かっててあげようと思って」

「うん…」
「あたしの好きなモノはね、歌…。唄う事が大好きなの」
「うん…」
「だからね、音楽の筋は悪くないと思うの。楽器造りも、いつも、かあさまの横で見てるし」
「うん…」
「風露での方が、『要る子』になれると思うの」
「そうか……」

ユゥジーンはリリの顔を染々(しみじみ)見た。
「リリはちゃんと、自分の事を見つめて、色々考えているんだね。俺、感心した」
「ホント？　お世辞でしょ？」
「ううん、俺がリリ位の時って、蹴り玉が上手くなる事とか、今日の晩御飯の事とか、そんなのしか頭になかったよ」
「ええ～～？」
「リリは凄いよ」
「ええ？、へへ…」
リリの頬がほころんだ。笑うとエクボが出来て可愛い。
「だけど、分かって。蒼の里ではリリを待っているって事」
「…!!」

リリがまた表情を硬くしたが、ユゥジーンは続けた。
「だからリリは、自分の考えをしっかり言わなくちゃならない。分かって貰えないって閉じこもっていないで、今みたいに、きちんと。ね…、俺、リリの応援団の一号になるよ」
「う…ん…」
「俺、正直いうと、リリに蒼の里へ来て欲しい。けど、リリがそんなに怖いを思いしてまで、無理する事ないと思う。里へ来る時は、リリが『来たい』と思って来て欲しいな」
「…うん」
「先の事って分からないじゃない。今こうやって話しているけれど、今日の昼間なんて、俺ら、お互いの事すら知らなかったんだよ。そう考えたら、出逢いって凄いと思わない？」
「へえ…」
リリはユゥジーンをマジマジ見た。
風露の関で小間使いのお当番の時、色んな外のヒトに会うけれど、そんな風に言うヒト、初めてだ。

ユゥジーンは足元の草を掻き分けながら、リリの斜め後ろを歩いた。この女の子の後ろ頭はナーガ様そっくりだ。長の血を一滴でも持っていれば俺ならなあ…と、ボォッと後頭部を眺めていると、リリがいきなり振り向いた。

「ねえ、あの綺麗な羽根、何の羽根？　カケス？　ヒガラ？」
不意を突かれたユゥジーンは、ドギマギしながら答えた。
「ト、トモダチのアカシ…」
「はあ？」
あの日シンリィに羽根を貰ったのは十数人で、皆それなりに大切に仕舞っているが、常に身に付けているのはユゥジーン一人だ。「何で？」って聞かれても答えられない。ただそうしたかったからだ。

「あっ!!」
リリの声で我に帰った。
「あったよ！　下ばっかり探しても見付からなかった訳だわ。あの、枝の上に引っ掛かってる！」
「本当？」
ユゥジーンは目を凝らしたが、すっかり暗くなってしまって見えない。
「こんな暗い中、よく見付けられたね」
「え？　だって、分かるでしょ？　あんなに光ってたら」
「光…？」
リリは迷わずサクサクと灌木を掻き分ける。ユゥジーンには露(つゆ)程の光も見えない。

「あれ、何?!」
先を行っていたリリが立ち止まった。
後ろのユゥジーンは慌ててリリの視線を追い、顔色をなくした。斜め上の空間に音もなく、昼間見た灰色の波が、どろどろと渦巻いているのだ。
「リリ、こっちへ!!」
手を伸ばしてリリの衣服を掴もうとした瞬間、膨らんだ渦がいきなり鉄砲水みたいに押し寄せて、二人を呑み込んだ。
「きゃああ――――!!」
身体が逆さになって、凄い力で巻き込まれる。指は届かず、リリの身体が持って行かれた。
「リリ――!!」
視界が真っ白になった。何てこった！　リリ！　リリ！

〜丘の上〜

「リリ!!」
流されるユゥジーンの視界から、子供はあっと言う間に消えた。
「ちくしょう！」

流れの中でもがく手を、誰かの手が掴んだ。
「??」
小さいリリの手ではない?、自分と同じ大きさの手だった。
その手の主が耳元で囁いた。
〈流されちまってよかったじゃないか、あのチビ〉
「な、何を?!」
ユゥジーンは顔を上げて、凍り付いた。自分の手を握って、流れにゆらゆら揺れているのは……自分だった。ゾッとするような嫌な笑いを浮かべた、…自分?!
〈誰もが羨む長の血筋に生まれたのに、職人になりたいだって? バッカじゃねぇの?〉
「バカって言うな! リリは真剣なんだ」
〈モノを知らないだけだろ。上手く里へ連れ出して、愉しい事を一杯教えれば、すぐにそんな気はなくなる。本心はそう思ったんだろ? お前〉
「ち、違う!! 俺は、ちゃんとリリの気持ちを尊重して…」
〈へへーん、ウソウソ! お前の本心なんかお見通しさ。だって、俺、お前だもん!〉
「ウソ付け! お前は魔性だ! 地霊かその類いだろ!」
〈ふうん、ま、その程度の頭だよな。俺なんだモン…〉

〈もう一個、お前の本心、教えてやろうか？　お前、ルウシェルとシンリィを美化し過ぎ〉
「…!!」
〈案外つまんない奴に成長してるかもだよ。あんま理想を高く持ってると、会った瞬間ガッカリするぞ。風露を訪れて肩透かし喰らったみたいに〉
「違う!!　ちが、ちが……!!」
〈お前はな、頭の表面で、何でもキレイに加工し過ぎなんだよ。本当は世の中、どーでもいい、くだらないモノばっかりなんだ。それじゃヤリ切れないから、無理矢理いろんなモノにおキレイな意味を付けて、人生を飾り付けようとしているだけなんだよ、お前は〉
　不意に視界を翡翠色の光が覆った。
　握っていた手がスッポ抜けて、歪んだ笑いの『自分』は渦の奥へ消えた。代わりに筋張った大人の両手が、ユゥジーンの手首と肘をガッチリ掴んだ。そのまま腕もちぎれんばかりに引っ張られる。
「いたたたた!!」
「…こっちの台詞だ…」
　身体の平衡が戻った。シンと静かな空気。流れはもうない。
　冷たい土の感触が身体の下にある。目を上げると、少し離れた所に自分の馬。月を逆光に、その手綱を取る背の高い男性。
　そして自分の横には、別の痩せた男性が、ぜぇぜぇ言いながら、丸まって転がっていた。
「このドジ!!　風の末裔が、空間の歪みに捕まっているんじゃない!!」
　痩せた男性は水色の髪を掻き上げながら怒鳴った。
「…シン…リィ……？」

　ユゥジーンの思わずな一言に、痩せた男性は豆鉄砲食らった顔になり、背の高いヒトは吹き出した。
「ボクは知らん！　とっとと里へ帰れ！」
「まあまあ」
　そう、シンリィの訳ない。大人の男のヒトだ。何でそう思っちゃったんだろう？
　ユゥジーンは上半身起こして辺りを見回した。月明かりに見覚えのある山影が見える。風露とそんなに離れていない場所だ。
「あの…、子供！　一緒に子供が流されたんです！　知らないですか?!」
「子供？」
　馬を落ち着かせていた背の高いヒトが、こちらへ歩み寄った。

暗がりから明るい所へ出て、顔が見える。
「ナーガ様っ?!」
「ナーガじゃないですよ…」
背の高いヒトは苦笑して首を傾けた。
「馬を労(ねぎら)ってあげなさい。貴方を助けようと、後を追って流されたんですよ」
確かに、ナーガ様とは違う…別人だ。でも、仕草とか雰囲気がそっくり…。

「蒼の里も世代交代だな」
痩せた男性がちょっと肩をすくめた。
「ボクが危険と感知したのはキミと馬だけだ。子供はいなかった。流されずに自力で逃げられたんじゃないか?」
「いえ、俺より先に流されて、掴まえようとしたけど、届かなかったんです!」
「…蒼の一族の者ですか?」
「はい、あの、大切な子なんです」
「大切じゃない子供なんていませんよ」
背の高いヒトは小高くなった場所へ歩いて、両手を回して印を結ぼうとした。
「あっ!」

しかしすぐに顔を上げ、丘の端に向かって駆け出した。痩せた男性も、弾かれたみたいに後を追う。
「子供は?!」
「子供は後だ、キミは伏せてろ!」

崖の先端の二人の頭上に、いきなりさっきの灰色どろどろの渦が現れた。
「まったく、しつこい!!」
「油断も隙もありませんね…」
渦は星も月も歪ませて、唸りながらこちらに向かって来る。背の高い方のヒトが、ユゥジーンを振り向いて言った。
「貴方、馬を守りなさい。怯えています」
「あっ、はい…」
ユゥジーンは立ち上がって暴れる自分の馬に駆け寄った。鼻面を抱えながら振り向くと、痩せた男性が両手を高く掲げている。その手に輝く緑の槍。
背の高い男性が印を結んで宣詞(のりと)を唱えた。一つ一つの呪文が凄い力で灰色の歪みを押さえ付けて行く。
凄い! 蒼の里でもこんな術、見たことない!
手刀で空を切ると、歪みはコマ切れに分断され、空中に散って消えた。

痩せた男性は緑の槍を消して、腕を下ろした。
「今回は、ボクの出番は無しか」
「『あちら側』からの助けが強かったですからね。まあこれで、ここいらの奴は終息するんじゃないでしょうか？」
何だか凄い事をやってのけたんだろうに、二人は呑気な感じで話しながら、ユゥジーンの側へ戻って来た。
「えーと、子供が何処にいるか…でしたっけ？　ちょっと待ってて下さいね」
背の高いヒトは少し離れて、さっきみたいに目を閉じて印を結んだ。
「あ・あの・・・」
こちらは聞きたい疑問が次々出て来るのに、二人とも何だかのんびりだ。ユゥジーンは小さく足踏みした。
「ジタバタするな」
痩せた男性が眉間に縦線を入れて睨んだ。
「子供は多分大丈夫だ。本当に危険だったのはキミだ。まったく、この辺りの空間が歪んで危ないって、ちゃんと執務室の石板に連絡したのに」
「えっ?!」
「ノスリはキミに注意しなかったか？」
「あ、いえ、ノスリ様は留守で…。俺、ホルズ様に言われて、書状を風露の部落に届けに来たんです。多分内容はその事だったと思いますが…」
「ホルズか」
痩せた男性は困った顔をした。
「相変わらず抜けてんな…」
＊＊＊
ユゥジーンはマジマジと二人の男性を見た。
背の高いヒトは小高い所でじっと目を閉じている。ナーガ様に似ていると思ったけれど、もう少し年輩で落ち着いた感じだ。
痩せた男性は腕組みをして、やはりじっと待っている。二人共、里でも見た事のない、知らない顔だ。でも、多分蒼の妖精だし、執務室の事も知っている口振りだ。
「あの…、あの歪んだ空間、何なんです？　俺、自分自身にエラい言われようでした」
ユゥジーンは気になっている事を聞いた。出来ればあのマボロシは、心を読んでデタラメを言う地霊の類いだと言って欲しい。
痩せた男性が苦々しい顔で答えてくれた。
「エラい言われようだったか？　そいつは残念だったな」
「えっ？」

「あの歪みは、捕らえた者の心の奥底に指を突っ込んで、掘っくり返して突き付けるのさ」
ユゥジーンは愕然とした。
「じゃあ、じゃあ…、あれは、純然たる俺なんですか?! あんな、意地悪な、陰険な…」
「狼狽えるな!」
痩せた男性は面倒臭そうに一蹴した。ショックを受けているんだから、もうちょっと優しくしてくれてもいいのに…。
「誰だってそうだ。裏と表があって心は分厚くなっている。だからみんな、裏の自分は心の奥底に押し込めて、周りと上手くやってんじゃないか。あの灰色の歪みは、せっかくしまい込んだダークな心の呟きを、わざわざ引っ張り出して並べて見せるんだ。タチが悪いったら。あんなのが大きくなったら始末に負えない」
「大きくなるんですか?!」
「ああ、キミも、下手したらアレを成長させるエサになってた」
「エサ?」
ユゥジーンは、灰色の中で消化されて、ドロドロ溶かされる自分を想像して、身震いした。
「…多分、キミの想像とは違うぞ…」
痩せた男性はユゥジーンを横目で見て、肩を竦めた。
「アレが喰いたいのは、奥の心の欲望のエネルギーだ。それには表の心が邪魔だから、殻を剥がすように、心が尽きるまで、ああやって、いたぶるんだ」
「心が、尽きる…」
「エネルギーを喰われたら、魚の骨みたいに放り出される。奥の心だけになって、理性も誇りもなくした、薄っぺらい陰険な自分。そうならなくてよかったな」
「……」
そんな恐ろしいモノがいたなんて、修練所でも、執務室でも、教わらなかった…。
「あの…」
問い掛けた所で、背の高いヒトが目を開けた。
「えーと、貴方?」
「ユゥジーンです」
「おぉ、良い名前だ。では、ユゥジーン、伝言を頼まれて下さい。リリの母親に」
「えっ?」
俺、リリの名前、言ったっけ?
「ちょっぴり用事が出来たので、帰るのが遅れると」

「??　リリが、ですか?」
「ええ」
「……」
「どうした?　返事は?」
「責任持って伝言出来ません。俺は貴方がたを知らないし、そっちのヒトが、何でリリの意向を知ったのかも、分からない」
二人の男性は表情を止めて、マジマジとユゥジーンを見た。
怒らせちゃったか?
「雛鳥の割にはさえずるじゃないか」
痩せた男性が、おっかない三白眼で覗き込んで来た。
「まあ、伝言せずとも、ボクらは何にも困りゃしない。その子供の母親が、不要な心配しなきゃならなくなるだけだ」
「……」
「意地悪を言うんじゃありません」
背の高いヒトが、助け船を出してくれた。
「私は、蒼の妖精の血を、感知する事が出来るのですよ。特にリリとは血が近いから、心を飛ばして会話も出来たのです」
「血が、近い?」
ユゥジーンは一生懸命頭を回転させた。じゃあ、ナーガ様によく似たこのヒトも、長の血縁者?
「さあ、とにかく伝言をお願いします。親御さんを早く安心させてあげて下さい」
「あの…」
ユゥジーンにはまだ聞き足りない事があったが、痩せた男性がイラつき気味に遮った。
「ヒヨッコがいちいちクチバシを挟むんじゃない。とっとと行け」
「あの、貴方がた、あの灰色の渦巻きを鎮めて、守ってくれているの?　草原を、皆を…」
「……」
「だから、何だ?」
「危険が存在するなら、もっと皆に知らしめて、大勢で協力した方が…」
「……」
二人は黙って、表情を固くした。
「ねえ!　俺、ナーガ様に言いますから」
「ナーガとノスリには告げていますよ」
背の高いヒトが努めて穏やかに言った。
「俺…、俺達、何も聞いていない…」
「ああ!　皆が皆、お前さんなら、言っても構わない!」

痩せた男性が苦々しそうに吐き捨てた。
「そうじゃないから厄介なんだ。大勢に知らせると、必ず草原の他部族中にも広がる。自分達の力が及ばない恐ろしい災厄が来るって知らせてどうする？　皆、怖がってパニクるだけじゃないか」
「でも…」
「もっと厄介なのは、災厄が終わって安全になった時だ。分かるか？」
「え？　喜ぶでしょ？。感謝しますよ、闘ってくれたヒトに」
「その後だ」
「…？」
「不満に思うんだ。災厄で受けた被害を、この位で済んでよかったと、喜ぶ者はあまりいない」
「…それは…」
「全ての者が…じゃない。でも、思ったより多かったんだ。『神のえこひいき』…そんな風に思っちゃう連中が」
「え？　えこひいき？」
「安穏の元に欲が湧く。欲しくなるんだ。強い力の存在を知ってしまうと。この灰色の歪みだって、元はと言えば…」
「カワセミ！」
背の高いヒトが塞き止めて、痩せた男性は口をつぐんだ。
「ユゥジーン、もう、お行きなさい…」
背の高いヒトは、立ち尽くしている少年の肩に手を置いた。
「貴方はナーガと共に、日々の自分の仕事をしっかりこなすんです。戦う者と日々を紡ぐ者…、それを分断する事に決めたのは私です。ナーガを問い詰めて困らせないでやって下さいね」
「……はい…」
ユゥジーンは小さく返事して馬に股がり、後ろを見ずに発った。振り返らなかったけど、自分を見送る視線は感じた。

ノスリ様やナーガ様が大きな災厄の存在を、執務室の自分達に内緒にしていた。本来なら隠されていた事にショックを受けて、腹を立てる所なんだろうけれど…。
さっき聞いた、痩せた男性の名前が、深く心に刺さっていた。
・・カワセミ・・・
シンリィの出自の口塞がない噂は、子供だった自分の耳にも届いていた。
里の皆がシンリィとそのお母さんを見捨てた形になった事。シンリィが里から離れて、お父さんとたった二人で七つまで暮さねばならなかった理由(わけ)。
……カワセミ…シンリィのお父さん……。
やっぱり、蒼の里とは切れていたいのだろうか…。

＊＊＊

ユゥジーンが風露の部落に引き返すと、関に沢山のカンテラが灯っていた。馬を降下させると、複数の者が手招きしたので、そのまま関小屋の前に降りた。

「リリは？　一緒じゃないんですか？」

一人の女性が走り寄って、白い手を掛けて詰め寄った。

「リリのお母さんですか？」

「ええ！　ええ!!」

「リリからの伝言を持って来ました」

「ああ……」

女性はよろめいて膝を付いた。よく見ると、このヒトはお腹が大きい。

山菜採りから戻った子供が、変な渦巻きがリリと蒼の妖精を呑み込んだのを目撃したと告げた。フウリはパニックになり、若者達が捜索に行こうと話し合っていた所だった。

「それで？　リリはどこに？」

「用事が出来て、ちょっと帰りが遅くなるって…」

「??　あの子は？　蒼の里ですか？」

母親は再び不安な顔になった。

「いいえ、分かりません」

「どういう事なんですかっ?!」

興奮するフウリを、周囲の者がなだめた。

ユゥジーンは山であった事を大まかに話した。自身も分からない事だらけなので、本当に大まかだ。

「俺、リリの無事を告げる為にここへ来ただけです。他の事は何にも聞いていません」

「そう…」

フウリはちょっと落ち着いたようだ。

「リリの伝言を受け取ったヒトは、信頼出来るヒトです。名前は知りませんが、ナーガ様とは旧知なようでした」

「本当に？」

関の周囲にいた若者達にも、安堵の空気が広がった。

「なあ、蒼の妖精さん、その空飛ぶ馬で、フウリを自宅まで送ってやってくれないか？　よせって言うのに、ツタを滑ってここまで来てしまったんだ」

「ああ、どうぞ、乗って下さい」

ユゥジーンは女性を助けて、馬に横掛けさせた。

「ねぇ…」

大人達に混じっていた数人の子供が、ユゥジーンの袖を引いて小さい声で言った。

「僕ら、リリを嫌いな訳じゃないよ。ただ、あいつ、ヒトの一番大事なモノを欲しがったり、嘘ついたりすんだ」

「リリが欲しいのは、モノじゃないんだよ、多分…」
「へ？」
「なあ、リリはいなくなるかもしれないけれど、今は皆と一緒にいる。先の事より、今を大事にしてやってくれないか？」
「…え？　イマオダイジニ…？」
「いつか分かってくれればいいよ」

馬の前に収まったフウリは『妖艶な美女』なんだろうけれど、不安気な表情は母親以外の何者でもない。子供を案じて心乱すのは、風露も蒼の里も、どこの部落だって変わらない。
自分が勝手に特別視して、勝手に拍子抜けしていただけだ。
「リリ、しっかりしているし、大丈夫ですよ」
「…ええ…」
馬をゆっくり飛ばして、フウリの指差す塔に向かいながら、ユゥジーンはそっと聞いた。
「お母さんは、リリが…何が好きで、どんな大人になりたいと思っているか、聞いた事ありますか？」
「えっ？　いえ、特には…」
「今度、聞いてあげて下さい」

ユゥジーンが蒼の里へ戻った時は、もう日を跨いでいた。

里は寝静まって、馬繋ぎ場に小さな松明（しょうみょう）が灯るだけだ。馬装を解いて馬を休め、居住区へ向かうと、執務室に明かりが灯っていた。
「おかえり…」
カンテラのオレンジに照らされて、ナーガが一人で待っていた。何だかいつもと違った雰囲気だ。
「ナーガ様、あの…」
「ああ、リリが心配かけたね、有り難う。大体は、カワセミから報せて来た」
ナーガの後ろの大机の上には、翡翠の石板が乗っていた。
「……」
「叔父にも会ったんだってね」
「あのヒト、ナーガ様の？」
「母の兄だよ。ノスリの前の蒼の長。今は大長を名乗っている」
「……」
そんな人達の存在を、何で隠していたんだろう？

唇をきゅうっと結んで足元の一点を見据えている少年に、ナーガはゆっくり話しかけた。
「ユゥジーン、君が不信感を持ってしまったのは分かる。でも、公にしなかったのには理由がある。君がそれを聞かなければ、

明日から僕を信じられなくなるのなら、今、質問に正直に答えるよ」
「教えて貰えるんですか?!」
ユゥジーンは顔をあげた。
「ああ、だけれど先に二つ言って置く。一つは、答えられない事もある…。あと一つは…」
ナーガは奥の大椅子に収まって指を組んだ。
「知ってしまうと、君も流れの一員になる。灰色の歪みは君をかぎ分けて、優先的に襲って来る。後戻り出来ない。いいかい?」
「えっ!」
ユゥジーンはちょっと目を泳がせて俯いた。優先的に襲われる? 確かに、おっかない……けど。
灰色の空間で会った、陰険な自分の並べた言葉を思い出した。ここで尻込みしたら、自分はこの先ずっと、あんな嫌な奴のまんまなんだ。
ユゥジーンはお守りのあった胸元に手を当て、コバルトブルーの瞳を上げて、ナーガをしっかり見た。

〜水底〜

……う〜ン……

……そうだ、ゆぅじんと一緒に変なのに吸い込まれて、ぐるぐるして気を失ったんだ…。
「うっ!」
口中にハッカみたいなツンツンが広がって鼻に抜けた。
ナミダと一緒に目を開いたら、真ん前に水色の瞳。
「――!! !! ――」
リリは跳ね起きた。
水色の瞳の主と思いっきり額をゴッツンコした。目から火花が散って頭がウァンウァンするけど、それどころじゃない。
「あああああたしのファーストキス〜〜〜!!」
目の前に色白の痩せた少年が、額を押えてうずくまっている。
「ひっひっひどいひどい!! ナニしてくれるのよォォ〜〜!!」
少年は起き上がって、手の中の乾いた薬草を揉んで口に入れた。リリの慌てっ振りはどこ吹く風だ。
「返して返して返して、あたしの……!!」
止まらない口をもう一度唇が塞いだ。ショックが二重になって、リリは目をぐるぐる回しながらぐったりした。
噛み砕いた薬草を口移しで与えてくれているんだ。要するに親切に手当てしてくれているんだけれど…。
「やめてってば!!」

リリは少年を思い切り突き飛ばして立ち上がった。
その時少年に緋(あか)い羽根があるのに気付いたけれど、そんな事はどうでもよかった。尻餅を着いて動かない少年の横をすり抜けて、リリは逃げ出した。
「…えっ…ええっ???」
空気が糊のようにまとわり付いて来る。どうして？一歩前に出るのに大変な力が要る。水の中を掻いているようだ。
それでもリリは必死で走り、ようよう走った所で後ろを振り返った。薄暗くて視界がはっきりしないけれど、少年は見えない。追って来ようとはしなかったのか。
「……」
ここ何処なんだろ？　遠くは見えないし、木も草もない。空気が身体にのしかかって、立っているだけで疲れて来る。
水の中に似ているけれど、息は出来る。空の月が辺りを照らしているが、光も水を透したみたいに歪んでいる。
リリは風露の部落と向かいのお山しか知らない。さっきの子の背中の羽根といい、世の中には色んなモノがあるもんだ…と思って、ちょっと冷静になった。
「確かに、あれは気付けのお薬だったわ。前に、かあさまに飲まされた事がある。でも、初めて会ったのにイキナリ口移しなんて、あり得ない！」
〈ホント、そうよね〉
急に声を掛けられて、リリは横っ飛びした。
「誰?!」
隣にリリの姿の女の子がいた。しかし、リリは驚かなかった。風露にはあまり精巧な鏡がない。水面に自分を映す機会も少ないリリは、自分の姿を知らなかった。
その女の子はリリの真横に立ち、すり寄るように言った。
〈失礼しちゃうったらないわ！　あたしを誰だと思っているのかしら?!〉
「…誰なの…？」
リリはその女の子をマジマジと見た。
〈ははは！　あんた、何言ってんの？　あたしはあんたなのよ？あんたはあたし！　蒼の妖精の長さまの大切な一人娘!!〉
「へえ…、ふうん？」
リリは相変わらずよく分かっていない受け答えをした。リリには、外の世界は知らないコトだらけなのだ。へえ、そういうコトもあるんだ…、ぐらいの気持ちだった。
〈ふん、じゃあ教えてあげる！　かあさまは、あたしをとっとと蒼の里へやりたいのよ。風露の子でないあたしが気持ち悪い

の。とおさまも、あたしの血統だけが欲しいのよ。あたしが何をしても無関心、叱ってもくれない。誰もあたしなんか本気で好きじゃないのよ〉
「そうネ、よく知っているじゃない」
〈……〉
女の子は、会心の嫌がらせを放ったつもりだったのに、あっさり肯定されて、つまらなさそうな顔をした。そんな女の子の表情には気づかず、リリは対抗するように言った。
「あんたがあたしなら、あたしだって世界中で一番あんたを知っているわ。あんたが一番好きなのは、唄う事…、どう?」
〈そうよ〉
女の子は苦虫を噛み潰したような顔で答えた。
「じゃあ、これも分かるわ。蒼の里へは行きたくない。でも職人にもなれないのは分かってる。皆に分かる音の違いが分かんないもん」
〈……そうよ…〉
「あたしの辛いの、分かって貰いたいのに、みんな、あたしの事、気にかけている風で、ちっとも知ろうとしない」
〈……そう…〉
女の子は俯(うつむ)いて涙をポタッとこぼした。
「可哀想に…。あたしが分かってあげる。こっちへおいで」
女の子は素直に近寄って、リリはその子の身体をギュッと抱いて、紫の頭を撫でてあげた。
「ああ…でも…」
リリはふと顔を上げた。
「さっき、ちょっと違うヒトに会った。ゆぅじん・・。あたしの話、ちゃんと聞いて、考えてくれたわ…」
〈……・・・〉
「あれ、あれれ・・?」
腕の中で、女の子はスウッと薄れて消えてしまった。
「お、おばけ?!」
さすがのリリも、ちょっと気持ち悪くなった。怖い!! と思った瞬間、辺りの揺らぎが激しくなった。
「…??!!」
上を見てビックリ仰天した。さっきまで静かだった水面みたいな空が、大雨の後の川みたいに渦巻いているのだ。
「ひゃああっ」
本能が危険を教えた。怖くて闇雲に駆け出した。でも、真上から来るモノに対してどこへ逃げろって言うの?!
うねりが地上に落ちて来て、覆い被さって来た。
「やだあぁっ!! かあさま!!」

＊＊＊

・・・・??・・・・・

うずくまった状態から目を上げると、四本の長い脚に囲われていた。見た事もない色の馬が、リリを庇うように立ち塞がっているのだ。

「・・・!!」

馬上にはさっきの緋い羽根の少年。

両手を天に突き出して、まるで空を支えているかのように、口をギュッと結んで小刻みに震えている。事実、空は渦巻くのを止めて、発酵し損ねたパンみたいにへこんでいる。

少年はゆっくり羽根を広げた。

空の渦巻きが反転して、真ん中に大きな穴が開いて行く。穴の向こうに、二人の蒼い髪の男のヒトが逆さまに見えた。片方の男のヒトは剣を持ち、もう片方のヒトは緑の槍を構えていた。

辺りが翡翠色の光に覆われ、リリは眩さに目を覆った。

目を上げると、空はすっかり静まって、先程空に開いた穴も、二人のヒトの姿も見えなくなっていた。

羽根の少年が、馬からふさりと飛び降りた。

「あ、あの…?」

何を言っていいのかドギマギする紫の娘にお構いなしに、少年は馬の腹の下に潜り込んで、ゴロリと横になってしまった。

「ね、ねぇ? あんた?」

近寄ってびっくりした。少年は汗びっしょりで、目の下が真紫だ。肩に触ると火照って熱かった。

「あっ、…ねえ、大丈夫?! どうしよう…」

リリは慌ててキョロキョロした。馬の鞍に水筒が付いていたが、中は空だった。さっき自分に薬草を与えた時に、全部飲ませてしまったらしい。

「あ、あんた、自分にお水、残しとこうと思わなかったの?」

少年は黄金虫の幼虫みたいに丸まって、荒い息をしている。こんなに苦しんでいるのに、水もお布団もないなんて、どうしたらいいの?

「……」

リリは少年の横に座って、その頭を膝に乗せた。それから熱っぽい手を握った。

「大丈夫よ…」

玉汗の浮き出る少年の額を、自分の袖で拭う。

「あたしがここにいるよ。あんたの熱を吸い取ってあげる。手を握ってずっと側にいるから、安心しておやすみなさい。目が覚めたら元気になってるよ」

リリは、ただ、自分が熱を出した時のかあさまの真似をして

みただけだ。他に出来る事がないんだもの。
少年は素直に目を閉じて、力を抜いた。
「助けてくれたんだよね、二回も…」

落ち着いてゆっくり見ると、少年の髪も睫毛も、冬の空みたいな薄い水色だった。最初は、ふうやお兄ちゃんと同じく、真っ白なのかと思ったのだが。
静かに見下ろしている馬は、とおさまの草の馬に似ているようで、全然違う。蒼の妖精さんではないのかしら？　羽根もあるし…。
座り直したリリの腰に、何か触った。
「あ、ゆぅじんの、お守り…」
拾った途端、変な渦に襲われて、必死でポケットにねじ込んだんだった。
「そういえば……」
リリはお守り袋の封を開けて、中の羽根を摘(つま)み出した。
「…あっ」
ホント、世界は不思議に満ち満ちている。袋から出て来た一枚の羽毛は、今、膝にいる少年の背中のそれと同じだった。
「まさか…？」
「その羽根は、シンリィのモノですねぇ」
またしてものいきなりな声に、リリは小さく飛び上がった。慌てて膝の頭を支えたが、少年は眠ったままだ。
目を上げると、何もなかった空間に、一人の背の高い男性が立っている。さっきの空の丸穴の向こうにいたヒトだ。
「とおさま？　違う…。だぁれ？」
「ユゥジーンに頼まれて、貴方を探しに来たんです」
ちょっと父に似たその男性は、周りの空間と同じように揺らいでいた。
「ああ、そう、ゆぅじんも無事だったのね、よかった。ね、お水持ってない？　この子具合が悪いの」
「ああ、私は今、意識だけで実体がないんですよ。触(さわ)れないし、何も渡せない。そちらからなら空間に穴を開ける事が出来るんですがね」
「そうなの、どおやって開けるの？」
まったく、外の世界は、おかしな事のオンパレードだ。
「術が必要ですから、まだ貴方には無理ですね。さっきシンリィが開けた穴がまだ塞がっていませんから、そこまで案内しましょう。導きますから、着いて来て下さい」
「ホント？　あ、でも…」
リリは膝の少年を見た。

「あたしじゃこの子を背負えない。ね、あんたはその穴からここに来られないの？」
「残念ながら」
「そう…どうしよう…」
「シンリィはそこを出ないんです。彼の馬がその子を守るから大丈夫ですよ。それより貴方、あまりその空間にいるのはよくない。早く出なきゃいけません」
「？？　この子は、いいの？」
「その子はね……いいんです」
「…？？？」
「シンリィは、欲も不満も疑念もない。奥も表もないのです。だからそこにいても、灰色の歪みのエサにならない。貴方、そこにいると、邪（よこしま）な語り掛けをして来るマボロシが現れなかったですか？」
「うん？　変わった子はいたけれど…、ちょっとお喋りしただけだよ。あれって、マボロシなの？」
「……」
「何？　何かイケナかった？」
「いえ……。ああ、それより、私もあまり長く意識を飛ばしていられないんです。さあ、立って」
「う…ん…」

　リリは、睫毛を縫い合わせたように無防備に眠る少年を、もう一度、じっと見つめた。この頭を地べたに下ろさなきゃならない…。今聞いたみたいに、この空間に他の者が入れないのなら、この子はずっとここで独りぼっち…？

「…あたし……」
「…？」
「この子に、側に付いててあげるって言ったの。だから安心して眠っているのに、目が覚めて地べたの上で独りだったら、きっと凄く寂しいわ」
「……」
「この子、あたしを助けてくれたのに、まだちゃんとありがとうを言ってないの。だからその…、欲とか、フマン、ギネン…？そういったモノを追い出して、ありがとうだけで頭を埋めていたら、ここにいてもいい？」
「……」
「…駄目かしら？」
「貴方なら出来るかも…、いえ、もう出来ているのでしょうね」
　背の高いヒトは、紫の前髪をじっと見つめた。
「ゆぅじんに、かあさまに伝言頼んでもよいかしら？　リリは遅くなるけれど、心配しないでって」

「伝えておきますよ」
「もしかしたら、凄く遅くなるかもって」
「凄く…ですか？」
「うん、この子がもし寂しかったら、寂しさが少なくなるまで、一緒にいてあげようかなあ…って思って」
「……」
すべての事に意味があるのなら、歪みに落っこちたリリを、シンリィが掬い上げたのには、どんな意味があったのだろう？
「私もそろそろ戻らなくては。ひとまず失礼しますよ」
「あっ…あの…」
「はい？」
「この子、しんりぃって言うの？」
「ええ、金鈴花（シンリィ・ファ）」
「しんりぃ・ふぁ……ファーストキスの相手の名前位、知っとかなきゃ…」
「えっ？」
「んー、何でもない！」
＊＊＊
全ての事に意味がある。
翌朝、風露の関を再訪するユゥジーンの姿があった。
「フウリさんに直接伝えねばならない事があるんです」
小間使いの子供を伝令に送りながら、関の番人はちょっと首を捻った。確かに昨日の若者なんだが、雰囲気が全然別人だ。一夜でニコ毛が抜けて、いきなり巣立ったツバメみたいだ。
「リリからの伝言です」
ユゥジーンはフウリに向かって姿勢を正して言った。
「用事が長引きそうなので、しばらく帰らないと」
「？？　蒼の里の預かりとなるのですか？」
「いえ」
「では、どこへ？」
「『居るべき場所』です」
「お願い、もっと分かるように言って」
フウリは焦れて感情的になった。
「これ…」
ユゥジーンはテーブルの上に、木彫りの人形を置いた。さっき、昨日の丘の上でカワセミから受け取った物。
「こっ…これ？！」
彫り跡の新しい二頭身人形を見て、フウリは目を見張った。
「フウリさんなら、使い方を知っていると」
フウリは神妙に頷いて、作業台から磨いた化粧板を取り上げ、

恐る恐る人形にかざした。
《かあさま！》
　板に写った小さいリリが声を上げる。
《ごめんね、急に。あのね…あたし、かあさまを恨んだ事があるの。なんで風露の子に生んでくれなかったの？　って》
「…!!」
《でも今は感謝してる！　あたしが生まれて来たのには、ちゃんと意味があるって分かったから！》
　ユゥジーンも初めて見る人形の力に、目を丸くしている。
《とうさまも恨んでた。あたしの血統だけ欲しくて、あたしの中身はどうでもいいんだ、って》
「リリ…」
《でも、かわせみさんが教えてくれた。とうさまは、そんなに『賢い』ヒトじゃないって。あたしと一緒で、怖がりなだけだって。だから、今度会ったら、ちょっとはお話しようかな…って思ってる》
「……」
《あたし、やる事が出来たの。独りぼっちで悪いヤツと闘ってるヒトの側にいてあげる事にしたの。それって、あたしじゃないと出来ないんですって。凄いと思わない？　この世にあたしじゃないと出来ない事があるなんて！》
　フウリは目をしばたかせながら、板に映る小さい娘を両手で包んだ。リリは暗い鏡面の中で微笑んだ。
《かあさまが寂しい時は、このお人形であたしの姿を見てね。かわせみさんがくれたの。優しいヒトだよ》
　それだけ言うと、鏡の中のリリはニコニコと笑っているだけになった。生まれて大した年数の経ってない娘は、あまり暴露する事もないのだろう。
「闘ってるって？　危険なんですか？」
　フウリは不安を口にした。
「妖魔や怪物の類いではありません」
　ユゥジーンは出来るだけ深刻に聞こえないように言った。
「ナーガ様も、共に立ち向かっているんです」
「何なんです？」
「ヒトの心です」
「…？？ヒトの…？」
「俺も、昨日聞いた所です。いまだにピンと来ません。ヒトの心の陰の部分を引っ張り出して、害為すモノがいると。蒼の里の者はそれを破邪で退けて回っています」
「……」
　フウリにはよく分からないようだ。

実際、ユゥジーンにも、イマイチ理解出来ていない。それって何なのか？　どこから来て、何が目的なのか？
ナーガ様は言わなかった。ただ、空間の歪みの性質と、闘い方だけは、夜を徹して教えてくれた。
ナーガの真摯な顔を見て、ユゥジーンは聞かない事にした。今、分からなくても、いつかきっと理解出来る時が来る。その時分かれば、それでいい。

「リリは、その『ヒトの心に害為すモノ』に負けないんです。それって凄い事なんです」
「リリが…」
フウリは茫然と鏡の中で微笑む娘を見つめた。確かに、いずれは蒼の里へやる娘と、覚悟して日々を送っていた。それを幼い心はちゃんと感じ取っていたのだ。
なんて未熟な母親だったんだろう。…ごめんなさい…。それに母が気付く前に、もう先に飛んでいってしまったのね…。
「あの…」
寂しげなフウリに、ユゥジーンがそおっと話し掛けた。
「リリ、蒼の里へ行きたくないって、楽器造りの職人になりたいって言っていました」
「えっ？」

「リリは自分の居場所を捜して、路頭に迷ってた。世界を不幸にする災厄と闘う場所は、リリにとってやっと見付けた『居るべき場所』なんです。将来、職人になるにしても、長になるにしても、今居る場所を経て、きっとそこへ行き着くんだと思います」
「……」
「すみません、生意気言って」
「いいえ……ありがとう…」

歪んだ空間にも昼夜はある。
白蓬の馬が、歪んだ朝の空へ舞い上がる。手綱を取るのは水色の髪を揺らめかせる少年。そして後ろには紫の前髪の女の子。
夕べ、もう一度背の高いヒトの『意識』が来て、色んなコト、教えて貰った。シンリィが独り、ここで闘ってるコト、自分が心を素直に開け放していれば、この空間にいられるってコト。

「あたしに何が出来るか分かんない。でも、あたしにだけ出来る事は見つけた！」

〜Ⅲへ〜